一

宵のうちから降り始めた雨が、いよいよ本降りになって薄い屋根を叩く。その音を開きながら、そろそろ五つをまわろうかというころに、おようは一人、留守居をしていた。

父の玄庵は、急病人があって、須田町の先まで往診に行っていた。出かけていってからもうかれこれ一刻はたつだろう。繕いものをしながら待っていたおようは、次第に落ち着かなくなってきた。

（やっぱり一緒に行くんだった）

玄庵は、ここ八辻が原先の十軒長屋で、もう十五年も町医者をしている。はやっているが、治療を受けに来る者たちの大半はその日暮らしの貧之人であるから、きちんと薬礼を払える者などめったにいない。玄庵のほうも、「無い袖は振れんだろう」などと言って取ろうともしない。だから、門前市をなすほどに患者たちがあふれていても、父娘の暮らしはいつもかつかつである。大店や大名のかかりになって、左うちわで暮らしている医者たちとは、天と

地ほどの差があった。

もっとも、おようはそんなことなど少しも気に病んだことはなかった。暮らしていけないわけではなし、足りない分は仕立物の内職でもすればおぎなえる。薬礼の代わりにと商売物を置いていく患者たちもいて、それもまた結構暮らしの足しになる。玄庵は腕が悪いのではなく、好きでこういう暮らしをしているのだから、何も嘆くことはない。おようの母親はおようを生んでまもなく亡くなったが、それから十八年、父娘二人で楽しく暮らしてきた。

おようはのびのびと育った。ふっくらした頬と下がり気味の目尻が愛らしく、はきはきしたところが、玄庵と同じくらい患者たちから好かれ、頼りにされている。

今、おようが父親の遅い帰りに気をもんでいるのは、このところ市中を騒がせている辻斬りのためだった。九月に入ってからだけでも、すでに三人斬られている。

この辻斬りの噂が人の口にのぼり始めたのは、春のはじめのころだった。風のように現れ、風のように消える。姿を見た者はみな、変わり果てた骸となって見つかる。用心深く、狙った獲物がもし犬を連れていればその犬までも斬るという周到さで、殺し方も酷い。どれもみな喉をひとかき、ほとんど首がとれそうなほどにかき斬られているのである。その手口から、誰が言い始めたのでもなく、この辻斬りは「かまいたち」と呼ばれるようになった。

いっそう恐ろしいのは、かまいたちが、人は斬っても懐中のものは狙わないことであった。江戸市民は震えあがった。正体が知れないために憶測が飛び交い、かまいたちの正体はやれ

お武家の試し斬りだの、乱心した食い詰め浪人だの、いや近頃では町人にも腕自慢がいる、そういう輩の腕試しに違いないだの、そしてまたそういう風聞が次の風聞を呼んでいく。なかには、どこそこの神社の御神体の妖刀が、夜な夜な人の生き血を欲しがっているんだなどと、読み売りが喜びそうな話まで出てきた。

「剣術の心得は相当にある者だろうが、尋常ではないぞ」

玄庵もそう言ったことがある。

「剣はある種の魔力を持っているものだ。世に剣豪とうたわれる者は、その魔力を飼い慣らし、自らのものにできた者のことだろう。けれども、そこまでの力のない者は、剣の力に足を取られる。剣が主、人が従になりはててしまうのだろうよ」

江戸の町では、ちょうど前の年、享保二年の二月に、大岡越前守忠相が南町奉行の座についたばかりであった。忠相は四十一歳。異例に若い町奉行である。当時、六代家宣、七代家継の治政において、非能率・不公平なことはなはだしく、弛緩しきっていた奉行所・評定所を根本から立て直すための、将軍吉宗の英断による抜擢人事であった。

期待にたがわず、忠相は次々と市政の立て直しにかかった。

なかでも力を入れたものが、言うまでもなく警察・司法制度の整備である。与力同心の風紀を正し、遅滞している訴えの数々を進んで取り上げ、罪の定まらぬまま何年間も伝馬町の牢につながれている者たちについても検めなおした。江戸市民がたちまち忠相に大きな信頼

を寄せるようになったのも、当然のことであった。

そこへ、かまいたちが現れた。

最初のうちは、「なあに、すぐに大岡さまがひっとらえてくださるさ」という声が高かった。かまいたちがいつお縄になるかをたねに、人を募って賭けをする者さえいた。血気盛んな若い連中が徒党を組み、「かまいたちの首を狙うんだ」といきまいていたりもした。

しかし、おおかたの予想に反して、かまいたちはいつまでたっても捕らえられない。確かな手がかりをつかんだという話すら聞こえない。そのあいだにも、無残な死骸はどんどん増えていく。

秋風のたつころになるとようやく、奉行所はいったい何をしているのだ、大岡さまはどうしたのだという声がちらほらと聞こえ始めた。それはすぐに、どこにいても耳をつく声高な批判に成長していった。町名主の中にも、「ことによると、かまいたちはお奉行さまの首も切ることになるやもしれぬ」と案じるむきが出てきた。奉行は忠相一人ではなく、北町にもれっきとした中山出雲守というおかたがいるのだが、こちらは老齢でもあり、また、忠相は日頃の信望があつかっただけに、いっそう批判の風あたりも強いものがあったのである。

もとより、お上でも厳しい探索をしている。しかし、これという成果はあがらない。

じんわりと、人を骨から侵す病のように、江戸の町を恐怖が押し包み始めた。誰もみな息を殺して家に閉じこもり、怪しい気配が近づいて来はしないかと怯えるようになった。それ

は、おようの暮らすこの長屋でも同じことである。
（それだというのに）心配がこうじて、おようは居もしない玄庵にあたった。
（父さんは怖いもの知らずにもほどがあるわ）
往診を頼みにきたのは、須田町の水菓子問屋の若い者で、息せききって冷や汗を流していた。
「お内儀さんがひどいめまいで倒れたんですが、外へ出るのは勘弁してくれと、どこの医者も来てくれません。困りはてておりましたら、ここの先生なら胆がすわっているからきっと来てくださると教えられました」
それを聞くと、玄庵はもう座ってはいなかった。もちろん、おようは止めた。
「普通の辻斬りとはわけが違うんですよ。父さんみたいに、一目で貧乏医者の一文なしとわかる身なりをしていたって、問答無用で斬られちまうんだから」
「かまいたちが百人も出るわけじゃなかろう。江戸は広い、心配するな」
「それならあたしも一緒に行きます」
「馬鹿もん。そのほうがよほど危ない」
そう言うなり、さっさと出て行ってしまった。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。